



教科書を使うとは

やすいふさこ
安居總子
前大正大学教授

始まりは「ん?!」

ふだんの生活で、ちょっと違った何かを発見する(心に留まる)と、「ん?!」とつぶやきます。疑問とも、肯定とも否定ともつかぬ、心のどこかで引っかかる感動です。それは持続することもあり、忘れてしまつこともありますが、「ん?!」がもとになって「学び」が始まっているのを覚えます。「ん?!」が人に向かうと「コミュニケーション」になり、文字情報に向かうと読書になります。「どのような学習者の「ん?!」をとらえて、どのような学習に結び付けるかを考えるのは教師の問題です。

いってみれば、「ん?!」は興味・関心のもとです。「ん?!」の内容がまったく個人的なものであれば、個の学びが高まり、加速して、どこまでも進みます。これはマニアックの世界です。それはそれでよい。しかし教育では、「ん?!」から学習を進展させなくてはなりません。「ん?!」と感じた、隣の人に話しかけたら同じように「ん?!」だった、そこから話し合いが始まった、一人、二人と話し合う仲間が増えて「ん?!」の中身が広がり濃くなり、多くの視点をもてるようになり、それを契機に文字情報にも向かった、ということ。このように、話し合うなかで一つの収束を得、それを仲間と共有して、さらに発展した次の学びに入っていく、というのが新しい時代の学びです。こうありたいものです。それにしても、「ん?!」を生じさせる場を提供し、そこから学びを進展させていく、その道筋をつくるのは教師の仕事です。授業づくりの原点です。

「ん?!」が授業をつくる

「ん?!」は無からは生まれません。言葉か、文章か、絵か、写真か、映像か、何かが必要です。例えば、先生の話物語・小説の類、古典の絵巻物、教科書のグラフィックにある写真とキャプション、生活の中のいろいろな言葉などは、「ん?!」を生む材料です。ただし、「ん?!」を生み出すためには、材料を教材化、学習材化する必要があります。「ん?!」を言葉の学習に結び付ける手続きです。どのような言葉の力をつけるのか、どんな言語活動をするのか、何を考えさせ、創るのか、といったことを考えながら材料を吟味する必要があります。当然、学習者が今、何を必要とし、何に関心を抱いているのか、つまり学習者の実態をつかんだうえで行います。これは、授業づくりにおいて最も重要なことです。「ん?!」をどのように導き出し、どのような言葉にしていくなか、どんな言葉の力をつけるのか、そこで何を教えるのか、学ぶのか、教師はもてる力を十二分に発揮して、授業の形にしていくのです。

教科書は「どう使う」

教科書には、次のような人たちがかわっています。

- 1 PRし、販売する人
- 2 (作る人) 創る人 編集する人
- 3 (使う人) 選定する人 指導する人
- 4 (使う人) 学ぶ人 教わる人

「創る・編集する人」に「指導する人」が加わって、「学ぶ・教わる人」のことを考えながら、「創り、編集した」ものが教科書です。一つのプロジェクトです。大都市、小都

ん?!!

市、農漁村、山間部、島、あらゆる地域の学習者を視野に入れながら学習場面を想像し、「ん?!」が引き出せて、「学び」に発展させられるような教材を選んで、単元に創っていきます。単元にするというのは、目標を置いて、どのような言語活動をして、どのような言葉の力をつけることができるのかを明確に示して、それにふさわしい教材を並べるということです。教科書の単元はそこまです。教科書はすべての学習者に向くように、最大公約数的に編集されたものなのです。「創る人、編集する人」たちの教科書づくりの理念があつて、教室で「指導する人」たちの現場に即した学習者のとらえと具体的な指導を想定して、「理想的」という含意でつくられたものなのです。ですから、かなり抽象度の高いものについてよいと思います。

教科書を使うとは、理想的に編集されたものを、自分の担当する学習者に合わせ具体化することです。しかし、自分の担当する学習者はどつかと現実を見てみると、学校の地域性や、学校の規模、学校をつくりあげているさまざまな文化や人間関係のなかで、個性あふれる様相を呈していると考えられます。ですから、指導者は、自分の教える子どもたちに対して、それに合った目標を立て、育てたい力、言語行動を、教材との関係で吟味して学習活動を選定し、授業を組み立てなければなりません。自分でカリキュラムをつくるのです。そこに教材・学習材候補として教科書が入ってきます。教科書は、吟味された教材だけでなく、単元の組み立て方や「ん?!」を導き出すヒントなど、自分のカリキュラムを

つくるときの参考となる内容がたくさん入っています。また、単元に構成され、配列されている教科書だと、単元構成のしかた、目標と育てたい言葉の力と学習活動が、教材をめぐってどのようになっているかを具体的に知ることができます。初めて教壇に立つ人は、教科書をなぞるように教えていってよい。十年選手は、学習の流れ（ストーリー）をつかんで自分の工夫を付け加える。あるいは、その学校独自の年間カリキュラムを作つて、そこに教科書を重ねてみるということもできます。

要は、学習者に応じて、学校の地域性や教師の個性に応じて、授業づくり、カリキュラムづくりをすることです。その中には、「総合的な学習の時間」との関係、選択教科との関係、「朝読書」など、学校全体の国語教育において国語科教育の果たすべき使命を考えることも忘れてはなりません。

指導者の姿勢「ん?!」

音声言語の学習は、学校や学習者、「総合的な学習の時間」との関係で、指導者の個性あふれる実践を期待したいところです。また、音声言語のみならず、文章にしていく作業も、「読むこと」と関連させたり、学習者の抱えている問題や地域での問題を取り込んだりして、指導者の個性あふれる実践を望みたいと思います。

大切なのは「ん?!」。学習者ウオッチングで学習者主体の学習を「ん?!」から展開する。生きた言葉の学習は、指導者のこつとした姿勢から生まれるといつものことです。